

小樽商大 30 年の思い出

永原和夫

小樽商科大学に私が着任したのは、1967 年 4 月のことです。そのまえの年の寒い冬の日、当時の学長実方正雄先生が私の前任校である奈良の帝塚山大学にご挨拶に来てくださり、駆け出しの英語教師が激しく高揚したことをいまでもはっきり覚えています。小樽商大にはマッキンノン、リチャード・ストーリー、速川浩、木曾栄作、清水春雄、太田朗、宇賀治正朋、北市陽一、飛田茂雄先生と続く輝かしい英語教育の伝統と実績があります。その末席に加えていただく名誉と責任の大きさに身震いしたものでした。

それから停年退官までの 30 年間につらいこと、不愉快なこともあり、また、講義がマンネリ化して他へ移ろうかと考え、実際、そのような誘いを受けたことが何度かありました。その度に私を思いとどまらせ、新たな出発を促してくれたのは、いつも学生諸君の励ましと、商大から英語の伝統を絶やしてはならないという使命感のようなものだったと思います。学会に出席するときは否応なしに小樽商大の英語の伝統を背負わされましたし、市民団体の会議ではいつも商大の英語教師として発言を求められました。

ながく務めた入試委員会の席でも私のなかには常に「北の外国語大学」のイメージがありました。商業教員養成課程に英語・英文学のゼミを作ってもらったときも、私は全く矛盾を感じませんでした。伊藤整、小林多喜二は別格としても、北海道の高校英語教育界に優秀な教師を数多く送り出してきた大学です。いわゆる空単位を 5, 60 単位も取って、苦労ばかり多く、恵まれているとは言い難い中・高校の英語教師になろうという変わり者たちのために、少しでも役に立てればと思ったのです。いまでは毎年 12, 3 人の学生が教職に就くようになりましたが、北海道の教員採用の割合からいって、これは大変な数です。彼らが年に一度母校に戻り、日頃の研究成果を発表し、教

育情報を交換する小樽商科大学教職研究会は、今年で10回目になります。卒業生と在校生とを繋ぐこの会の重要性はいくら強調しても足りません。

1991年の短期大学部改組のとき、省令施設として言語センターができると思った人が何人いたろう。6外国語各12単位オファーといういまでは考えられない構想が教授会で承認され、ドイツ語教官2名、フランス語と中国語の教官各1名、それに外国人教師（英語）1名と文部技官1名が新たに配置されて、全国有数の言語センターが発足しました。小樽商大の外国語教育の伝統の力がなければできなかったことです。当初の計画は私の後を継いでセンター長になられた江口修教授のご尽力でそのほとんどが完成しました。いよいよその真価を発揮するときです。

国際交流については、人ない、物ない、金ないののないないづくしのなかで「交換提携校10大学、留学生50人計画」を藤井栄一元学長や船津秀樹教授と熱っぽく話し合ってから11年が過ぎ、英語で講義をする短期交換留学制度ができるまでに成長しました。大学の教育・研究に不可欠な国際交流の仕事に少しでもお手伝いできたことを喜びといたします。いろいろ助けてくださった諸先生、職員の方々に心からお礼を申し上げるとともに、本学の国際交流活動が、国際交流センターを中心にますます発展するよう祈ります。

30年も経ちますと楽しかったことしか思い出さないので、そのひとつが海外研修です。大学院のときから勉強してきたジェイムズ・ジョイスに関するハリー・レヴィンの著書を、飛田先生のご尽力で、1978年に北星堂から翻訳してもなお、この難物とどうつき合っていけばよいのか思いあぐねていたときに、在外研修の機会を与えられ、世界有数のジョイス・コレクションを持つニューヨーク州立大学バッファロー校へ行き、困ったときには一次資料に当たればよいのだということを学びました。一次資料には有無を言わせぬ力があるものです。あの時ジョイスに沈潜していなければ、トム・コノリー、マーク・シェックナー、レスリー・フィードラー等の教えを受けていなければ、その後の日本アイルランド文学会やジョイス協会での私の仕事はなかったらうと思います。アカデミックな人たちだけでなく実に多くの友人に恵ま

れ、バッファローで過ごした2年間は、小樽商大からいただいた最大の贈物のひとつです。

授業では、一般英語の他に英文学史と英文学概論、教職ゼミを担当していましたが、いつも文学作品を読んでいたような気がします。教室でテキストを読むのは、真剣勝負をするようなもので、少しでも気を抜くと必ず手痛いしっぺ返しを受けます。ことばの形態と文化に触れながら学生の知性と想像力を刺激するつもりでいて、どれだけ学生に教えられ、発見があったかわかりません。商大生も年々変わりはしましたが、すべて掛け値なしにいい学生です。

停年に際し、私は「モダニズムの文学について」と題して最終講義をさせていただきます、山田家正学長の有り難いお言葉をはじめ、教職員の方々、学生諸君から抱えきれないほどの花束を頂戴し、教師冥利に尽きる思いをいたしました。万感の想いをこめてお礼申し上げます。

これからの外国語教育はますます実践的語学力が要求されるでしょう。文学など入る隙間がなくなるかもしれない。しかし、言語は社会の約束であり、文化です。いかに運転技術が達者でもルールとマナーを守る心がなければ、他人に迷惑をかけるだけでなく、運転者自身が自滅します。国際社会でいま日本に求められているのは、相手国のルールとマナーを十分に理解し、自説を正しく伝えられる真の国際人です。「実用と文化との調和の上に立つ外国語教育の研究と実践」という言語センターが掲げた目的に向かって着実に進まれることを祈念してやみません。

最後になりましたが、浅学非才な私のために『人文研究』が特集号を組んでくださったことは、望外の喜びです。これを励みに今後ともジェイムズ・ジョイス研究に少しでも貢献できるような仕事を続けていく所存です。編集にあたられた先生、この号に執筆くださった諸先生に深く感謝申し上げます。